



みくるべひがしこうち
三廻部東耕地遺跡 (秦野市No. 125)

所在地 秦野市三廻部 140 外
期間 平成 31 (2019) 年 4 月 1 日～
 令和 2 (2020) 年 2 月 15 日
調査面積 6,567㎡
担当者 諏訪間直子・後藤信義・吉澤 健
 塚田順正・秋元陽光・井辺一徳
 南出俊彦

調査概要

秦野市上地区に所在する三廻部東耕地遺跡 (秦野市No. 125) は、中日本高速道路株式会社が計画する新東名高速道路建設にともなう事前の発掘調査として平成 29 年 6 月 16 日から継続して調査を実施しています。調査地点は秦野市の西部、小田急線渋沢駅の北西約 2.5 km にあります。足柄平野を流れる酒匂川の支流である四十八瀬川右岸で、標高 250 m の河岸段丘上に位置しています。平成 31 年度の主な調査成果としては、近世、中世、平安時代、縄文時代中期初頭の遺構、遺物が発見されました。

(1) **近世** 段切り、溝、宝永火山灰廃棄土坑、畠跡 (ウナイクルミ跡) が発見されています。ウナイクルミとは、この地域の近世文書で使用された名称で、宝永噴火による火山灰を畠地に鋤包み、復旧させている行為をさします。畠跡は耕作における鋤跡が広がっている形状のもので、耕作土に宝永火山灰が 2～3 回鋤込まれた状態が確認できました。急峻な斜面地を段切りによって緩やかにして、畠を耕作していた様子が明らかとなりました。

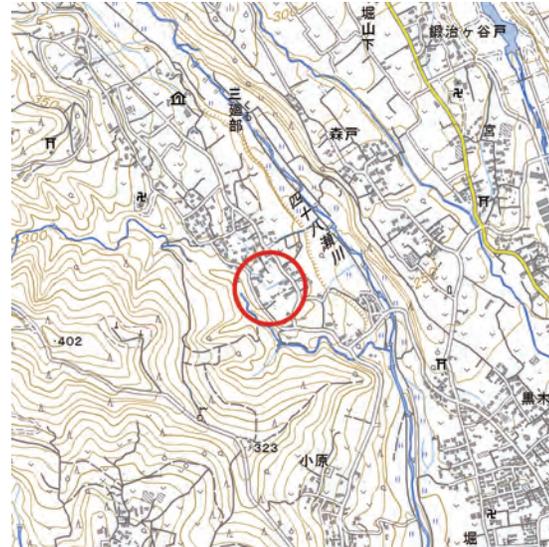


図1 調査地の位置 (1/25000)

(2) **中世** 溝、土坑墓、土坑、ピットが発見されています。土坑墓は、まとめて埋葬されていた屋敷墓と単独で埋葬されていた土坑墓とに分けられます。特筆される遺物として、土坑墓から和鏡が出土しました。鏡面にはススキ柄の確認できる漆片が付着していたことから、漆塗りの木箱に納められていたものと考えられます。鏡の文様には菊の花と 2 羽の小鳥が描かれていました。「菊花双鳥鏡」といいます。和鏡はその他にも昨年度の調査で一面発見されました。ともに「菊花双鳥鏡」で、13 世紀後半から、14 世紀ごろに作られたものと思われる。

(3) **平安時代** 竪穴住居跡が調査全体を通して 13 基発見されました。南向きの尾根上緩斜面に集中して作られていたようです。カマドは東側に作られていた住居が大多数で、柱状の礎を多く使い、縦長に据えてソデ部および焚口を作っ

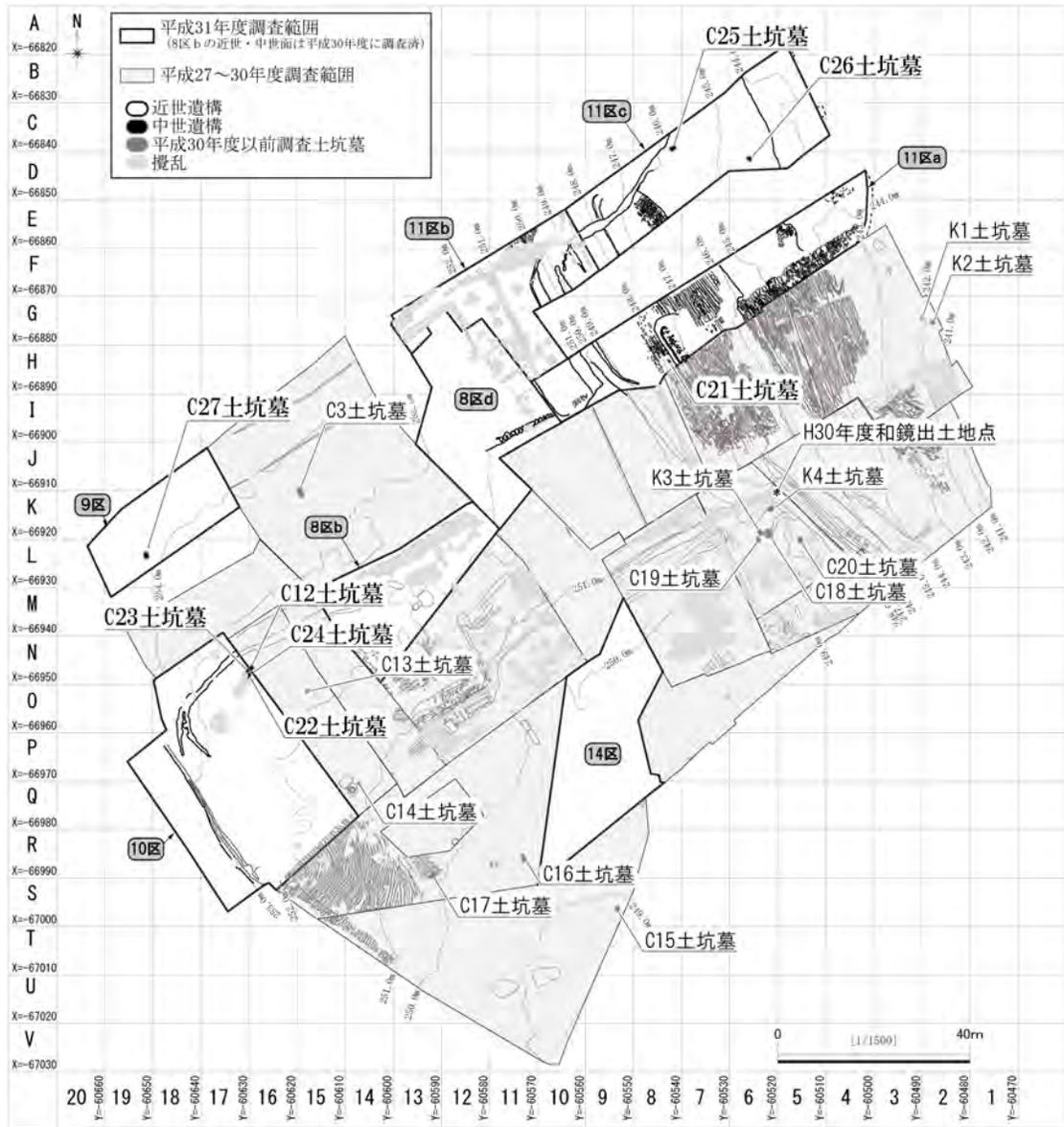


図2 中世土坑墓位置図 (S=1/1500)



写真1 11区a 畠跡完掘状況 (北西から)



写真2 9区C27土坑墓遺物出土状況 (南から)

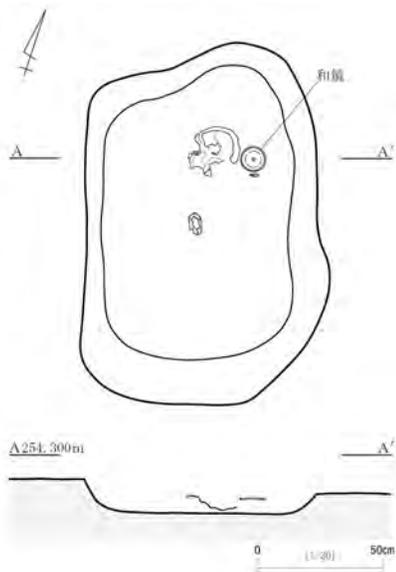


図3 C27 土坑墓 (S=1/30)

ています。なかでも H9 号住居跡はカマドの作りがよくわかる状態で発見されました。

(4) 縄文時代 竪穴住居跡、土坑、配石、集石を検出しました。竪穴住居跡は縄文時代中期初頭の五領ヶ台期のもので、これまでの調査も含めて7基検出されたことは大きな成果といえます。J4 配石は礫の上面に縄文時代前

期末から中期初頭頃の土器がまとめて出土しました。

まとめ

今年度で、新東名高速道路の一部の用地を除き、三廻部東耕地遺跡の調査は終了となりました。主な調査成果としては西側の曾我沢と東側の四十八瀬川にはさまれた台地上に、神奈川県内では事例の少ない縄文時代中期初頭（五領ヶ台期）の住居跡がまとめて確認できたことがあげられます。平安時代から中世にかけては、小鍛冶に関連すると考えられる遺構も検出されました。出土した遺物量は多いとはいえませんが、中世初頭（鎌倉時代）の秦野市内において、出土事例の少ない和鏡が合計2面出土するなど、山間地の遺跡としては希少な例が多く、中世において要衝の地であった可能性を示す結果となりました。

(諏訪間 直子)



写真3 C27 土坑墓出土 和鏡 (右は X 線写真)



写真4 10区 平安時代遺構遠景（北東から）



写真5 10区 H9 住床面検出状況（西から）



写真7 10区 H9 住カマド石組み検出状況（西から）



写真6 10区 H11 住遺物出土状況（西から）



写真8 10区 H11 住カマド検出状況（西から）